

〈死〉と〈暴力〉のエチコ=ポリティカル・ エコノミー：デリダと田辺における〈メ ディア〉と〈アート〉の間文化研究

田島, 樹里奈 / TAJIMA, Jurina

(発行年 / Year)

2017-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第390号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2017-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(国際文化)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013925>

博士學位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	田島 樹里奈
学位の種類	博士 (国際文化)
学位記番号	第 614 号
学位授与の日付	2017 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 森村 修 副査 教授 松本 悟 副査 教授 佐々木 一恵 副査 教授 牧野 英二

〈死〉と〈暴力〉のエチコ=ポリティカル・エコノミー
デリダと田辺における〈メディア〉と〈アート〉の間文化研究

1. 学識確認試問の成績

2016 年 12 月 17 日の公開口頭試問においては、論文審査とともに、筆者の学識を確認するための試問（語学に関する能力の確認も含む）も行った。その結果、本小委員会としては、著者が高度な研究能力およびその基礎となる豊かな学識を有していることを確認した。

2. 論文内容の要旨および審査結果の要旨

1. はじめに

本研究は、「メディア (media)」と「アート (art)」という二つの概念に着目し、両概念が「死」と「暴力」に潜在的な仕方で結びついていることを「間文化研究 (intercultural studies)」の立場から明らかにする試みである。結果的に、本研究が指摘するのは、社会や国家における「死」と「暴力」の「エチコ=ポリティカル・エコノミー (ethico-political economy)」の構造であり、こうした構造を回避しようとする社会や国家が、「安全保障 (security)」の名の下に、倫理-政治的に排除される「異質な他者」(=カール・シュミット「政治的なもの」における「敵」) だけでなく、社会や国家内部に存在する「自己」や「友」すらも、攻撃の対象とする「自己免疫疾患的状况」に陥っているということである。

本研究は、「間文化研究」という観点から、20 世紀後半以降に、大きな影響力をもってきたフランス現代哲学者ジャック・デリダ (Jacques Derrida, 1930-2004) の「脱構築 (déconstruction)」の哲学を方法論的に積極的に活用しながら、メディアとアートに潜む「死」と「暴力」の「贈与と交換 (economy)」の構造と、その構造を胚胎する社会や国家の「自己免疫的状况」という問題に肉薄する意欲的かつ独創的で、斬新な論考である。

ちなみに、学際的な文化研究としては、20世紀末に英語圏を中心に「カルチュラル・スタディーズ (cultural studies)」が領域横断的な研究として広まってきた。また「間文化研究」という研究スタイルも、「日本国際文化学会 (The Japan Society for Intercultural Studies)」の英文タイトルに用いられているように、国内でも徐々に認知度が高まりつつある。また哲学・思想分野に限って言えば、「間文化哲学 (Interkulturelle Philosophie, intercultural philosophy)」がドイツ語圏を中心に研究を蓄積させており、デリダが影響を受け、筆者もまた影響下にある現象学的哲学の分野でも、「間文化現象学 (intercultural phenomenology)」による暴力現象学研究が進んでいる。

しかし、これらの哲学分野における「間文化研究」は、西洋文化・西洋思想を基盤としている点で、従来の西洋哲学の枠組みを超えていない。また東洋思想を積極的に評価してきた「比較哲学 (comparative philosophy)」の試みも、21世紀に入ってからある種の行き詰まりを見せている。それに対して、本研究は、哲学的思考に基づく理論的・原理的な研究でありながら、単なる理論偏重に留まらず、死と暴力という主題の「間文化性」に着目することで、北アイルランドの地域研究にも目配りを欠かさないという点で画期的な論考となっている。さらにいえば、田島論文は、これまでのいわゆる「間文化研究」や「カルチュラル・スタディーズ」に見られる文化研究を超えて、個々の個別学問や研究領域を超える新たな試みとして、〈国際文化研究〉の新たな可能性を拓く試みであり、斯学の将来性の期待される論文である。

本研究の主要な骨格をなす諸論考は、主要な部分が哲学・思想分野における権威ある日本現象学会編『現象学年報』、比較思想学会編『比較思想研究』(2編)など全国規模の学会の査読論文や、哲学・思想分野で最も権威ある日本哲学会、日本倫理学会における査読付き口頭発表原稿からなり、加えて日本国際文化学会『インターカルチュラル』(査読付研究ノート)、『国際文化研究への道』(彩流社)、法政大学国際文化学部編『異文化』、『法政大学大学院紀要』などに収録された諸論考を大幅に加筆・修正して、学位請求論文の目的に相応しく全体としての統一性を構築し、論述と主題の一貫性を確保したものである。

本研究の基本構成は、以下の目次のように序論および本論3部11章そして結論からなる。

2. 論文の研究目的と考察方法

本研究の目的は、「間文化研究」の立場から、以下の五点を解明することである。第一に、メディアとアートという二つの概念が死と暴力に潜在的な仕方で結びついていることを、「中間・媒介・媒体 (media)」と「技術・芸術 (art)」の語の原義を最大限に活用することによって解明する。第二に、メディアとアートに潜在する死と暴力の結びつきに、理論的な側面と実践的な側面の両面からアプローチすることによって、両者の結びつきのうちに、「倫理-政治的 (ethico-political)」な意味での「贈与と交換」の「エコノミー」が関わっていることを解明する。第三に、メディアとアートに関して、二項対立的な価値の序列化や価値の階層秩序を決定する「境界設定 (démarcation)」がある種の「暴力性」を孕んでいることを解明する。第四に、この「価値の境界設定」そのものが「自己免疫 (autoimmunity)」と類比的な構造を担っていることを明

らかにし、「価値の境界設定」そのものが孕む「暴力性」によって、価値の序列や価値の階層秩序が自ら崩壊することが避けられず、「自己免疫疾患 (autoimmune disease) 状態」ともいべき事態に陥る可能性があることを指摘する。

第四点目に関して、本研究で検討される自己免疫的構造は、生体の生理学的システムに着想を得た象徴的な意味で用いられている。それゆえ、本研究における自己免疫的構造とは、生体の免疫システムと類比的に、われわれの生・生活 (life) を守るために必要な自己保護機能であるが、ある閾を越えてしまうと反対に守るべき「自己」を攻撃し、「生・生活」の自己否定に至り、最終的には「死」に行き着くことも避けられないことを意味している。

以上の四点から、本研究が最終的に明らかにしたいのは、第五に、倫理-政治的な意味における死と暴力の「贈与と交換」を意味する「エチコ=ポリティカル・エコノミー」を限りなく回避する社会や国家が、「安全保障」の名の下に、倫理-政治的に排除されるべき「異質な他者」だけでなく、自らの内部にある「自己」すらも、攻撃の対象とするという「自己免疫疾患の状態」にあることである。

上記の研究目的を達成するために本研究では、「間文化研究」の立場から、理論的側面と実践的側面という二つの側面からアプローチする。理論的側面へのアプローチとしては、田辺元 (1885-1962) とデリダの哲学テキストの解釈を活用し、また実践的な側面へのアプローチとしては、地域研究としての北アイルランド紛争をめぐる言説を取り上げる。

まず本研究が依拠する「間文化研究」においては、以下の三つの「間／相互 (inter) 性」が強調されている。(1) 様々な学問の「境界」を横断し、諸学問の知見を協同させることによって、互いの学問の利点を活かす「学際性 (inter-disciplinary)」、(2) 様々な国民国家 (nation-state) の「境界／国境」を侵犯し、複雑に交流する人やものをグローバルに捉える「国際性 (inter-nationality)」、(3) 書かれたものとしての「エクリチュール」だけでなく、文化事象をそれぞれ個別の「テキスト」として捉えることによって、それぞれの「テキスト」相互の関係や構造を「テキストのネットワーク」として捉える「間テキスト性 (inter-textuality)」、以上の三つの「間／相互性」である。筆者の理解では、「間文化研究」とは、こうした三つの「inter (間／相互性)」が交叉する文化事象を、文化の「間」ではたらく「相互性」を踏まえて、「間-文化的 (inter-cultural)」に捉えることによって成り立つ。つまり、本研究では、「間テキスト性」に基づいて文化の諸相を分析すること、さらには多角的・複眼的に「文化と文化の間」の「境界線」に立つことで、^{インターテクスチュアル}間テキスト的分析を実践することができると考えられている。

以上のことを踏まえた上で、本研究は、デリダの脱構築哲学を、デリダ自身の意図に反して、倫理-政治的な理論的実践の考察方法として積極的に採用する。というのも、デリダにとって脱構築とは単なる哲学的な考察方法に留まらず、デリダ哲学そのものを意味するのに対して、本研究では、デリダ脱構築哲学を哲学的考察方法として解釈することによって、分析対象を一元化することを可能にするからである。つまり、筆者によれば、歴史的事実に関する言説であれ哲学テキストであれ、それらの言説群は、「エクリチュール (=書かれたもの *écriture*)」群として一元的に把握される。その結果、本研究では、それらの「エクリチュール」群は、「エクリチュールの

集積」としての「テキスト」として一元的に扱うことが可能となる。

その意味で本研究もまた、様々な文化事象という「テキスト」を間テクスト的に分析し、「倫理-政治的解釈」を实践するという、ひとつの理論的実践として位置づけられる。さらに本研究にとって脱構築哲学的な考察方法が重要なのは、この方法が、われわれの日常生活の思考や判断、さらには中立的なものと考えられる言語活動の中にも「倫理-政治的な次元」を見出し、われわれの日常生活の様々な営みを多重的・多角的に政治化するからにほかならない。それゆえ、筆者の理解によれば、脱構築とは、政治化を引き起こす哲学であり、かつ理論的実践を意味している。

3. 論文構成

本研究の構成は、次の3部11章からなる。第1部では、独自の解釈で弁証法を重視する田辺哲学を「媒介=メディアの哲学」として特徴づけ、「死」をめぐる田辺の思想のうち「エチコ=ポリティカル・エコノミー」構造が潜在していることを明らかにする。また、科学技術がもたらした原子力時代を「死の時代」として捉えた田辺の「死の哲学」を中心に以下のテーマを検討する。第1章では、田辺哲学を「倫理-政治的な観点」から、「媒介」と「死」の哲学として特徴づける。その際に、初期から晩期に至る哲学的な営みを概観することを通じて、田辺哲学が「自然科学の哲学」から「実践の哲学」へと移行したことを「弁証法」という点から確認すると同時に、田辺哲学と宗教思想との密接な関わりについて検討する。第2章では、田辺の後期から晩期にかけて「懺悔」と「死」をめぐる田辺の「死の思想」から、そこに内在する「エチコ=ポリティカル・エコノミー」を明らかにする。その際、田辺哲学の最終的な到達点としての「死の哲学」に至る道を浮き彫りにする。第3章では、田辺の「友愛民主主義」論を検討することで、田辺の「政治哲学」が極めて宗教的な色彩の濃いものであることを指摘する。また田辺の「宗教的国家論」における天皇制の意味づけを確認する。第4章では、田辺の晩年の「死の哲学」に焦点を当て、「犠牲」という概念を中心に検討する。さらに、田辺最晩年の『マラルメ覚書』（1961）における「死」の思想を検討することで、田辺の「死の哲学」と「象徴」概念の意味について考察する。これらの問題点を解明することを通じて、田辺における「犠牲」思想の変遷をたどり、そこに伏在する「倫理-政治性」を明らかにする。

第2部では、「媒介・媒体」という意味を持つ「メディア」概念に注目しながら、その概念に潜在している倫理-政治的な意味での「暴力」を明るみに出すことを目的とする。第5章では、近年のメディア論で大きく取り上げられている「宗教のメディア化」の問題について検討することで、「メディア」と宗教との関わりに関する問題点に触れる。その上で、デリダの「メディア」と宗教に関する脱構築思想を検討する。第6章では、デリダの「来たるべき民主主義」論から、デリダ脱構築哲学における「言語のポリティックス」を明らかにする。また本章では、言語を一つの「メディア」として捉えることで、脱構築の言語哲学的な戦略に光を当てることを試みる。第7章では、一転して、現実的なポリティックス（real politics）の問題を取り上げる。特に北アイルランド紛争をめぐる言説を「テキスト」として扱い、脱構築的方法を用いて分析することを通じて、国家における権力的な「暴力性」を明らかにする。

第3部では、デリダのカント『判断力批判』解釈に基づいて、「アート」(=芸術)に潜在する「暴力性」の「エチコ=ポリティカル・エコノミー」を哲学理論的に分析することを目的とする。第8章では、デリダの「パレルゴン」概念を用いて北アイルランドの壁画を脱構築的に分析する。第9章では、デリダ『絵画における真理』(1978)所収の「パレルゴン」論文を内在的に分析する。その際に筆者は、「アート」作品における「境界設定」の問題を浮き彫りにし、言語という「制度」の問題を検討する。第10章では、デリダの『絵画における真理』と同時期の「エコノミメーシス」(1975)論文を中心に、カント『判断力批判』に即して、「アート」と「趣味」の問題を分析する。第11章では、前章に続いて「エコノミメーシス J」論文の後半部を中心に、デリダの「口」にまつわる議論を分析する。筆者は、デリダが「口」の中では「味覚 (goût)」と「趣味 (goût)」との間に矛盾が生じ、それをある種の「アレルギー」として解釈する点に着目する。最終的に筆者は、デリダが「趣味 (taste)」の問題系のなかで「吐き気」を分析することに着目する。というのも筆者の見解では、「吐き気」という「アレルギー反応」は、単なる生物学的な個体の体内機能にとどまらず、二項対立的な暴力的「境界設定」に基づく、社会や国家における他者排除や差別のような「暴力」の問題として応用解釈可能であることを明らかにする。

以上から本研究の意義は、以下の三点に集約できる。第一に、〈メディア〉と〈アート〉に潜在する〈死〉と〈暴力〉の結びつきと、両者の相互不可分な関係を、理論と実践の両側面から解明することによって、無感性的な状態にあるわれわれの「生/生活 (life)」の感受性を触発すること。第二に、多様な価値観を許容せず、様々な価値の序列化や階層秩序ヒエラルキーを形成するために推し進める二項対立的な「境界設定」が、いかに「暴力的」であり、かつその「境界設定」そのものが無根拠であるかを理論的に批判する。第三に、「自己」と「非自己」を明確に弁別し、アイデンティティ (=自己同一性 identity) を保守するために、異質な他者を排除する安全保障の思想が、結果的に自己崩壊を齎すという逆説的な構造をもっていることを指摘すること、以上の三点である。

4. 論文の目次

凡例

初出一覧

序論

- 1 本研究の目的と意義
- 2 本研究の考察方法
- 3 本研究の基本構成

本論

第1部 〈死〉と〈媒介〉のエチコ・ポリティックス

第1章 田辺における絶対媒介の哲学

- 1 「科学哲学者」田辺元の弁証法
- 2 ヘーゲル弁証法との対決と〈実践の哲学〉への歩み
- 3 後期田辺哲学の変転
- 第2章 実存協同と死者の哲学
 - 1 「死生」講義の実践的「死」
 - 2 哲学としての「懺悔」
 - 3 他者救済と「実存協同」
 - 4 「実存協同」という「他者」の到来
- 第3章 「社会民主主義」と宗教的国家のポリティックス
 - 1 「デモクラシー」の哲学的基礎づけ
 - 2 田辺の「社会民主主義」論
 - 3 「友愛民主主義」による宗教的国家論
 - 4 〈絶対無としての象徴天皇〉のポリティックス
- 第4章 絶対無と象徴のポリティックス
 - 1 「自己犠牲」の転換契機としての「忍」
 - 2 科学技術時代における田辺のニヒリズム
 - 3 「死の哲学」から見たマラルメ解釈
- 第2部 〈メディア〉と〈暴力〉のエチコ・ポリティックス
 - 第5章 メディア化時代の〈ユダヤ・キリスト〉教
 - 1 「宗教のメディア化」とは何か
 - 2 「宗教」の意味論的二源泉
 - 3 キリストという「メディア」とメディアの亡霊化
 - 4 『死を与える』イサク奉獻をめぐって
 - 第6章 「来たるべきもの」としての「民主主義」
 - 1 「民主主義」を問い直す
 - 2 ローティのデリダ批判
 - 3 パフォーマティブな発話のポリティックス
 - 4 文学のポリティックスと「民主主義」
 - 5 〈プラグマティックな脱構築〉の可能性
 - 第7章 制度化された〈暴力〉とエチコ・ポリティックス
 - 1 セキュリティ時代の倫理的課題
 - 2 プロテスタント社会における〈暴力〉の連鎖
 - 3 インターネット導入と剥き出しの〈暴力〉
 - 4 「5つのテクニク」という実験拷問
 - 5 エチコ・ポリティックスから見た〈暴力〉
- 第3部 〈アート〉のポリティカル・エコノミー

- 第8章 紛争の痕跡と壁画〈アート〉
 - 1 北アイルランド壁画と「パレルゴン」
 - 2 「パレルゴン」なき「エルゴン」の不可能性
 - 3 壁画に残された〈暴力〉の痕跡
 - 4 紛争と壁画の切断不可能性
 - 5 北アイルランド壁画のポリティックス
- 第9章 〈アート〉をめぐる境界と制度
 - 1 『判断力批判』における「装飾」の位置づけ
 - 2 『宗教論』における「付」と欠如
 - 3 人工補綴としての「パレルゴン」
 - 4 芸術作品の〈制度〉化と〈境界設定〉
- 第10章 美感的判断力におけるポリティックスとエコノミー
 - 1 カント「存在-神学的人間主義」のポリティックス
 - 2 エコノミーとミメーシス
 - 3 バタイユ「エコノミー」論の脱構築
 - 4 詩人の「口」のポリティックス
- 第11章 セキュリティ時代の回帰する暴力
 - 1 趣味のポリティックス
 - 2 〈五感のポリティックス〉と自己触発
 - 3 「吐き気」と「表象不可能なもの」
 - 4 〈絶対的排除〉のポリティックス
 - 5 自己免疫的〈暴力〉の21世紀

結論

注

結論

参考文献一覧

5. 初出一覧

序論 書き下ろし

第1章 「田辺元における実践と媒介の哲学」（法政大学国際文化学部編『異文化』第18号、2017年、所収予定。）

第2章 「「死の哲学」と「不可能なもの」——田辺元からJ・カプートへ」（査読論文）（比較思想学会編『比較思想研究』第39号、北樹出版、2013年、所収。）

第3章 「田辺とデリダにおける「犠牲」の思想」（査読論文）（比較思想学会編『比較思想研究』第40号、北樹出版、2014年、所収。）

第4章 「絶対無と象徴のポリティックス」（査読論文）（法政大学国際日本学研究所編『国

際日本学』、応募中・審査待ち。)

第5章 「メディア化時代の『宗教』——デリダにおける『世界ラテン化』」(法政大学国際文化学部編『異文化』第16号、2014所収、2015年、所収)。

第6章 「来たるべきもの」としての「民主主義」——「脱構築とプラグマティズム」という問題」(法政大学国際文化学部編『異文化』第13号、2012年4月、所収。)

第7章 「北アイルランド『インターンメント』における制度化された〈暴力〉」(査読付研究ノート)(日本国際文化学会編『インターカルチュラル』第14号、風行社、2016年3月。)

第8章 「アートのポリティックス——北アイルランドにおける壁画の脱構築的読解」(熊田泰章編『国際文化研究への道』(共著)、彩流社、2013年4月、所収。)

第9章 「作品をめぐる〈境界〉と〈制度〉——デリダ『絵画における真理』の「パレルゴン」解釈を手がかりにして」(法政大学大学院編『法政大学大学院紀要』第77号、2016年10月、所収。)

第10章 「デリダ「エコノミメシス」における「不可能なもの」——『判断力批判』のポリティックス」(査読論文)、日本現象学会編『現象学年報』第29号、2013年11月、所収。)

「『判断力批判』の「ポリティックス」と「エコノミー」の問題——デリダ「エコノミメシス」を中心に」(第64回日本倫理学会大会自由課題、口頭発表・2013年10月6日、於：愛媛大学。)

第11章 「デリダの趣味判断批判における『アレルギー』と『吐き気』の問題——カント『人間学』と五感のポリティックス」(第73回日本哲学会大会自由課題、口頭発表・2014年6月28日、於：北海道大学。)(法政大学国際文化学部編『異文化』第17号、2016年4月、所収。)

結論 書き下ろし

6. 本研究の成果

本研究は、間文化研究の立場から、以下の五点を明らかにした。第一に、媒体・媒介としての「メディア」と、科学・芸術としての「アート」という二つの概念が、「死」と「暴力」に潜在的な仕方で結びついていること。第二に、メディアとアートに潜在する死と暴力の結びつきに、理論的な側面と実践的な側面の両面からアプローチすることによって、両者の関係のうちに^{エチコ=ポリティカル}倫理・政治的な意味で「贈与と交換」^{エコノミー}が関わっていること。第三に、メディアとアートに関して、二項対立的な価値の序列化や階層秩序を決定する「境界設定」がある種の「暴力性」を孕んでいること。第四に、「境界設定」そのものが「自己免疫」と類比的な構造を担っているがゆえに、自らの「暴力」によって価値の序列や価値の秩序が自壊することが避けられず、「自己免疫疾患」とも言うべき状態に陥る危険性があること。

それゆえ、本研究の最終的な結論として第五に、死と暴力の「エチコ=ポリティカル・エコノミー」を限りなく回避する社会や国家においては、自己防衛を主とする「安全保障」^{セキユリティ}に関して、そもそも「敵」として排除されるべき異質な他者だけでなく、自らの内部にある「自己」あるい

は「友」も攻撃してしまうという「自己免疫疾患」的状況に陥る可能性のあること、以上の五点を明らかにした。

また、これら五点を解明するために、田辺元とジャック・デリダ両者の間文化的な哲学を用いることは、思想や文化の間に存在するさまざまな「境界線」を越境し、共通性を見出すことを可能にした。われわれは、思想や文化の東西の違いだけでなく、さまざまな角度から考察することで、多種多様な形の共通性を見出すことが可能であり、グローバル化した時代の中で、思想がになう役割の重要性に気づくことができる。

本研究を通じて明らかになったように、明治期に生を受け、敗戦後の混乱から高度経済成長を迎える時期まで、北軽井沢の地で生きた田辺は、変わりゆく日本の文化・思想を謹厳実直に生き抜いていた思想家であった。一方、フランス領アルジェリアに生まれた同化ユダヤ人という特異な地域性と民族性を抱えながら生を受けたデリダは、終戦を15歳の多感な時期に迎え、さらに思想家となつてからはフランス本国よりも、他の地域や国の方で評価が高く、それらの地での彼の活躍は目覚ましい。それゆえ、彼は「マージナル（辺縁的）な思想家」であったといえるだろう。筆者の理解によれば、田辺やデリダのような他分野の思想を束ねる視点が間文化研究であり、それを可能にしているものが哲学的思考である。それゆえ、本研究の成果として、21世紀のグローバル化した時代の中で、間文化哲学がになう役割の重要性と必要性を強調するのである。

本研究の第1部では、田辺の哲学を取り上げることで、科学技術としての「アート」の進歩発展が、われわれの生を脅かす可能性があることを指摘した。さらに彼の哲学が「媒介＝メディア」を重視することから、田辺哲学を「メディアの哲学」として特徴づけた。さらに本研究では、時代に即応しすぎたために、田辺哲学が陥った危険性を指摘することで、「倫理-政治的」な「実践の哲学」の可能性と危うさを明らかにした。また、原子力による「死と暴力の時代」を「死の時代」と定義づけた田辺の「死の哲学」を中心に、われわれの生／生活がつねに「死／死者」とともにあることを確認した。それゆえ、第1部の研究の成果を具体的に下記の三点にまとめてみたい。

第一に、筆者は田辺哲学が一貫して「即」の論理に基づく弁証法を基礎に置き、絶対的に相反する対立項をも結びつける「絶対媒介の弁証法」を唱えることで「媒介＝メディアの哲学」であることを明らかにした。その一方で、科学哲学者として出発した田辺が、晩期に至るまで科学技術（＝アート）に関心をよせ、時局に敏感に反応することで、実社会に対して実践的に関わろうとした「倫理-政治的」な実践の思想家であったことも解明した。

そこから本研究では、田辺の「実践の哲学」が、その影響力から、戦時下において若き学生らに対して、「国家と神と人との三一構造」に基づいて、「自己犠牲」としての「死」を語るという過ちを犯してしまったことも指摘した。その結果として、田辺の「実践の哲学」は、国家の暴力に加担することになり、「自分の死を与える」という「死の贈与」としての「ポリティカル・エコノミー」を引き起こすことになったのである。以上から、筆者としては、学徒出陣に代表される戦前・戦中の帝国日本の政治政策は、その自殺的行為を実践することで、ある意味で、自己を守るために自己自身が破滅する（自己免疫疾患）の状態を呈していたということができる。

第二に、筆者は、田辺の「実践の哲学」が時代迎合的な態度を取らざるを得なかったことを戦時中から戦後にかけて彼の講演や政治哲学論文から明らかにした。こうした田辺の実践重視の態度は、結果として田辺自身を徹底的な自己否定へと導くことになり、「懺悔」というある種の負債を背負うことになる。筆者は、田辺が自ら「懺悔」することによって「自己放棄」に随順し、絶対他力の行としての懺悔道へと導かれた経緯を明らかにした。また田辺は、自らの「社会民主主義」論において、戦時中の自らの立場への「懺悔」に基づいて、民主主義国家建設を「政治哲学の急務」として捉えながらも、自身の国家に対する態度としては、戦中からの国家論を引き継いでいることは否めない。結果的に筆者の理解では、田辺は、象徴天皇制（君主制）と社会民主主義（民主制）という対立・二律背反を乗り越えるために、「絶対無の象徴としての天皇」による宗教国家というヴィジョンを棄てることができなかった。

第三に、筆者は、田辺が、科学技術が齎した「暴力」による「死の時代」を打開するために「死の哲学」を提唱し、「死復活」や「実存協同」といった独自の「宗教哲学的思想」を展開することによって、最終的には「愛」の哲学を構築したことを明らかにした。また、最晩年の『マラルメ覚書』では「死の哲学」の新しい側面としての「自死」と「死」を偶然性と必然性の相克として取り上げたことを明らかにした。筆者の見解では、田辺にとっての「忍」概念は、「無即愛」を意味し、「死の贈与」という「エコノミー」を断ち切る「愛」の概念にはかならない。しかも田辺の「実存協同」の基本的な思想は、田辺自身と亡き妻という「生者と死者との実存協同」として具体的に考察されていた。こうした「死の哲学」の試みは、最晩年の『マラルメ覚書』において、自己犠牲的死としての「自殺」（自死）と、運命としての死との二律背反の問題として捉えられていく。そこで田辺は、「死」をめぐる偶然性と必然性のせめぎ合いをマラルメの二つの詩『イジチュール』と『双賽一擲』から分析したのである。

続いて第2部は、理論的な側面へのアプローチと具体的で実践的な側面へのアプローチとの橋渡しの位置づけにあった。ここでは、「メディア」概念を広い意味で解釈しながら、「媒介・媒体」としての「メディア」概念がさまざまな仕方で「暴力」と結びつき、「エチコ=ポリティカル・エコノミー」を形成していることを明らかにした。また、最新のメディア論やデリダの脱構築哲学という理論的アプローチと、北アイルランドにおける「壁画」を「媒体・媒介」という「メディア」として取り上げるという実践的なアプローチの両側面から、「メディア」概念の意味とその「倫理-政治的な意義」を検討した。

理論的なアプローチとして、第一に、最新のメディア論の知見から「宗教のメディア化」が問題にされ、さらにデリダによるキリスト教における「メディア」思想が検討された。しかも宗教が「倫理-政治化」されることによって、キリスト教的「犠牲」の思想が極めて「倫理-政治的」な要素を孕んでいることが明らかになった。メディア論の文脈から検討することによって、21世紀以降の急速な「メディア」化が、われわれの生活を情報化し便利にした一方で、それらの利用によって知らず知らずのうちに宗教すらも「メディア化」され、われわれのうちに「体内化」されていることが明らかになった。このことは、公的領域と私的領域の境界線をも曖昧にさせ、遠隔技術（=アート）としての「メディア」が、「暴力」のエコノミーを創出していることを浮

き彫りにした。

第二に、第1部の田辺に引き続き、デリダの「犠牲」概念を検討することによって、キリスト教的な宗教による「犠牲」概念が「エチコ=ポリティカル・エコノミー」構造を背景にしていることを明らかにした。そこに神への信仰と人間の倫理との間に生じる「倫理-政治的^{エチコ・ポリティカル}」な問題が、宗教と倫理-政治との深い断絶があることを告げている。

第三に、デリダの「民主主義」論を検討することを通じて、民衆を「媒介=メディア」にすることで成立する「民主主義」の問題を、デリダの「来たるべき民主主義」から検討することで、「民主主義」という政治形態そのものの存在を疑問に付し、「言語のポリティックス」として解釈可能であることを明らかにした。そして「来たるべき」という時間性が、言語行為論で重要な「約束」という言語行為と密接に関わっていることを明らかにした。

第四に、実践的なアプローチを採用し、北アイルランド紛争のさいに導入された「インターメント」と、それに伴うイギリス政府などの公権力側の対応を検討した。そうすることで筆者は、国民の安全保障を名目として合法的に導入された施策が「政治的正当性 (justification)」を確保したとしても、実際には、非倫理的な行為を引き起こす可能性があることを明らかにした。つまり、国家政策による他者排除の強化が、敵と味方の「境界線」を曖昧にし、手当たり次第に排除を遂行する無差別的な過剰暴力の応酬 (=ポリティカル・エコノミー) を引き起こしていたことを明らかにした。そのさい公権力としての軍が、拷問というテクニク (=アート) を行使し、人権をも剥奪する (暴力) を引き起こしていたことも明らかにした。

最後の第3部では、「プラグマティックな脱構築」の方法を用いて、実践的な側面と理論的な側面を繋ぐことを試みた。特に、実践的な側面としては第2部で触れた北アイルランドに立ち並ぶ「壁画」を取り上げ、デリダの「エルゴン/パレルゴン」理論を用いて脱構築的に読解した。つまり、「壁画」を公共の場に立ち並ぶ一つの「ポリティカルな素材」として解釈することで、筆者は「壁画」のテーマとして描かれた紛争という、いわゆる「政治」としての「大文字のポリティックス」と、「エルゴン/パレルゴン」構造がもつ、「政治的なもの」としての「小文字のポリティックス」の双方を、「アート」における「暴力のポリティックス」として明らかにした。

また、「芸術」としての「アート」に関して、カント『判断力批判』(以下、第三批判と略記)のデリダによる脱構築的解釈を用いて分析し、人間の嗜好(趣味)に関する区別を判断する「趣味判断」を「エチコ=ポリティカル・エコノミー」の視点から明らかにした。そこで筆者は、第三批判が五感の中でも味覚(趣味)を頂点とする感覚の階層秩序に基づいて、価値の序列化を行なうという「倫理-政治的な」価値体系を形成していたことを明らかにした。しかも本研究から明らかになったのは、「口」から入るものが「体内化」されずに、「吐き出される」という生体防衛のシステムと、社会や国家が自らに同化=体内化しえない異質な他者を排除するという構造とが類比的であるということである。

第3部では、第一に、デリダの「エルゴン/パレルゴン」概念に着目することによって、芸術作品における主要な要素と副次的な要素を分ける「境界画定」の問題を顕在化させ、両者が不可分な関係にあることを明らかにした。また、本研究において、「エルゴン/パレルゴン」構造か

ら導き出された「「アート」とはなにか」という問いに対し、視覚的な絵画であれ結果的に「芸術とは何か」という問いそのものが言語的に表現されざるを得ず、そこには「言語という制度」が不可避的に関与していたことが明白になった。

つまりデリダは、歴史的に伝統的に問われてきた芸術をめぐる問題が、実際には言語に拘束された問いであり、閉じた円環（＝エコノミー）のなかで問われるしかない問いであることを暴露したのである。筆者は、デリダの「テキスト」の読解を通じて、デリダが「パレルゴン」概念に執着したのは、まさに二項対立的な形而上学的な思考や、「制度」に伴う固定された思考のパターン、そして構造的な価値序列を解体するためであったことを解明した。

第二に、デリダの第三批判読解を「ポリティックス」と「エコノミー」という二つの言葉に注目しながら分析し、デリダの「テキスト」を解釈した。それによって筆者は、カントの趣味論に人間主義的な「ポリティカルな思想」が介在していることを明らかにした。しかも筆者は、カントの論述のなかに見出した「エコノミー」概念を脱構築的に解釈することを通じて、デリダがジョルジュ・バタイユの「エコノミー」論をも脱構築したことを解明した。

第三に、デリダによるカント趣味判断の批判を手がかりとして、カントの趣味論に潜むある種の「暴力性」や排除の論理を明らかにした。つまり筆者は、デリダがカントの五感に関する論述のなかで潜在する自己触発の構造を見だし、ロゴス・フォーネ主義を指摘した点を積極的に評価したのである。そうすることで筆者は、カントの五感に関する論述に、西洋形而上学的な価値観に基づくある種の「五感のポリティックス」が含まれていることを明らかにした。

第四に、以上の三点を踏まえて筆者は、デリダによって明らかにされたように、カントの五感の中で「口」が最も優位にあるという指摘を受けて、デリダの「吐き気」の分析に注目した。そこから筆者は、「エコノミー」の一種としての「体内化」に対する拒絶反応である「吐き気」の問題を取り出した。しかも筆者は、生体防御システムとしての「吐き気」が、アレルギーを含む「免疫」の問題を含意していることに着目し、「吐き気」をたんなる生物学的な個体の体内機能にとどまらず、社会における他者排除や差別といった「暴力」の問題につながることを明らかにした。さらに筆者としては、デリダが、すでに2001年の「同時多発テロ」の時期から「自己免疫」の社会的排除構造に着目し、テロリズムや「暴力」に対する過剰防衛の危険性を示唆していたことを解明した。

以上の具体的な研究成果からも明らかのように、本研究では、哲学「テキスト」始まり、われわれを取り巻く様々な歴史的事象（あるいは、事象をめぐる言説）を多様な「テキスト」として扱い、それらの「テキスト」に非顕在的に含意された「死」や「暴力」を読解することを試みた。

そのさい重要だったのは、「テキスト」が孕む様々な価値や価値づけの中に、「倫理・政治的^{エチコ・ポリティカル}な価値の階層秩序^{ヒエラルキー}が含まれていることであつた。そして、われわれが理解しなければならないのは、それらの価値の間に引かれる「境界」を設定することに、ある種の「暴力性」を見出し得ることである。端的に言えば、本研究で解明されたのは、さまざまな価値の間に何らかの「境界線を引く」＝「境界設定する」ことによって、価値の中に階層的な区分が「暴力的に」設定され、それがわれわれの価値観を構成していることである。

そこで本研究の成果を踏まえて、筆者の見解は、価値の間に設定される「境界」や、そこに引かれる「境界線」はつねに吟味され、再設定される必要があるということである。われわれは、固定した価値観に固執するために、時代の変化や倫理-政治的な価値の流動化に堪えられない一方で、田辺のように真摯に時代の流れに寄り添いながらも、大局的には誤った方向に導かれる可能性がある。これらのことは忘れるべきではない。それゆえ、われわれの今後の課題としては、〈境界設定の暴力〉の無根拠性に常に対処しながらも、多様で複雑な価値や、価値の間にある微細な差異を見逃さず、多様な文化や思想、多様な言語や民族の共存の可能性を問い続けることにある。

微妙で瑣末ともいえる価値の間の差異も、個々人やさまざまな民族における価値の序列を体現している可能性もある。重要なのは、それらの差異を尊重しつつ、いかに持続させるかということにある。筆者は本研究を通じて、高度に発達したグローバルな社会が、個々人の思想や個々人の言語の豊かさを失うことなく、それぞれの幸福を追求するための倫理的な規範を確保する必要があると考える。それはローカルな視点を確保することであり、多様な在り方を容認することでもある。しかし、それが他者を傷つけるような「境界」を生み、他者の排除という「暴力」になってはならない。筆者は、カントが 200 年以上前に唱えた「永遠平和」の理念とは、地球という閉じられた空間のなかで、「自己」と「非自己=他者」の共存としての共生の可能性への示唆であり、差異を消去する同一化を限りなく回避し、互いの差異や価値の差異を限りなく承認し合う方向性へと向い続ける努力にあると考えている。

7. 本研究の総合評価

以上の研究は、テーマの設定や考察方法、さらに論述および内容から見て、多くの卓越した見解と独創的な論点を提示している。その主要な論点は、次の四点に集約されよう。

第一に、田島論文は、学際的な研究としての「間文化研究」という立場の強みを利用して、田辺哲学やデリダ脱構築哲学などの哲学思想領域、北アイルランドをフィールドにした地域研究、仏教思想やキリスト教思想などの宗教思想、北アイルランドの壁画分析や象徴派詩人ステファヌ・マラルメの詩の分析などの芸術学研究に至るまで、多様なジャンルの研究を参照しながら、「死」と「暴力」の「エチコ=ポリティカル・エコノミー」という統一的なテーマを追求しようと試みた研究の成果である。このことによって田島論文は、「間文化研究」のひとつのあり方を示したものとして、独創的で優れた研究成果をあげている。

しかもこれまでの「間文化研究」があくまで文化と文化の「間」、国家と国家の「間」、理論と実践の「間」を唱い、「間／相互 (inter) 性」を標榜していながら、結果的には個別研究の延長の域を出ない研究が多い中で、田島論文が画期的なのは、個別学問や研究領域の深部にまで哲学的思考を到達させることで、個別研究や研究領域を超える新しい試みであるからである。さらに田島論文は、学問間、文化間、国家間などに横たわる価値観、宗教観、イデオロギーなどの類似性と差異性にまで説き及び、それぞれの差異を超えた共通性を抉り出すことを実行したという点において、「国際文化研究」の新たな可能性を拓く試みであり、斯学の将来性の期待される論文

であるといえよう。

その特徴として田島論文の背後には、いかなる合理的な根拠に基づいて価値の間に「境界線」が引かれうるのかという問題意識がある。それゆえ、本研究は、個人の間、学問領域の間、国境の間など様々な水準で引かれる「境界線」には合理的な根拠がないばかりか、暴力的に「境界線」が設定されていることを問題化することに的確に現われている。田島論文は、あらゆる「境界設定」が何らかの価値秩序に依拠しており、結果的に他者の排除に繋がる可能性が不可避であることを明らかにするという刺激のかつ野心的でスリリングな論考である。

第二に、田島論文は、「死」と「暴力」という、21世紀の現代において無視することのできない重要かつ重いテーマを扱っており、倫理的観点のみならず、政治(学)的観点をも取り入れた、従来の倫理学的研究とは異なる、独創的で優れた研究成果を挙げている。特にその主要部である第3部は、哲学研究としても優れており、田辺哲学研究やデリダ哲学研究など、専門分野としての哲学・倫理学研究の水準を維持している。さらに田島論文は、田辺哲学とデリダ脱構築哲学や、カント哲学とデリダ脱構築的哲学との「比較」に留まらず、それぞれの間にある共通性と差異性を明らかにすることで、つねに両者の「間」に立ち、相互関係を分析しようという姿勢が貫かれている。田島論文が単なる「思想の比較」を回避しているのは、田辺哲学とデリダ脱構築の比較に力点があるのではなく、「エチコ=ポリティカル・エコノミー」の構造を両者の哲学テキストから明らかにするという点に力点が置かれているからに外ならない。その結果、カント『判断力批判』(以下、第三批判と略記)を脱構築的に解釈するデリダが、それと同時にジョルジュ・バタイユの「普遍のエコノミー」と「限定的エコノミー」との対立をも脱構築するという戦略を取っていることを明らかにすることを可能にした。これらの点で、田島論文は、比較哲学・比較思想研究の域を超えているだけでなく、最近の「間文化哲学」や「間文化現象学」のレベルをも十分に超えている論文である。

第三に、デリダ脱構築哲学を考察方法として積極的に採用したことで、哲学テキストや史料的言説をある意味で「テキスト」に還元することを可能にし、テキスト解釈をさまざまな文脈に「接ぎ木する」(デリダ)という脱構築の戦略を取り入れることに成功している。しかも、本研究は、哲学テキストと歴史的史料のみならず、筆者が生きる21世紀の現実的・社会的なコンテキストをも「テキスト」として把握することで、筆者の立場と歴史的言説との相互の往還的關係を巧みに描き出している。田島論文の第2部では、グローバルな観点とローカルな観点的相互性・相補性を「グローバルな視点」から捉え直し、さらに共時的な観点と通時的な観点を踏まえながら、北アイルランド地域の壁画分析を行なっている点で、極めてオリジナルで優れた研究といえよう。

第四に、本研究は、多数のジャンルや専門領域を越境し、まさに「ボーダーレス」な研究として常に様々な文献を渉猟することを余儀なくされているにも関わらず、関連分野の参考文献にも目配りを欠かさず、テキストに真摯に向き合い、予断や先入観を持たずに対決する姿勢を失っていない。これは本論文に顕著な特徴である。こうした特徴は、先行研究の成果や様々なテキストへの言及として膨大に付せられた注に見ることができる。その意味で田島論文は、常に筆者独自の視点を明確に意識し、先行研究との差異化を図りながら、オリジナルな解釈を提示している。

しかも田島論文は、3部11章という大部にあり、様々な問題点が鏝められていながら、「死」と「暴力」の「エチコ=ポリティカル・エコノミー」の構造解明を目的とするという統一的な観点が堅持されているために、非常に読み応えがある内容をもっている。

しかし、本研究もまた、意欲的で斬新かつ刺激的な試みには不可避ともいえる論述内容の説明や論証の不十分さ、全体の構成上の問題点や考察方法等の疑問点や課題が見出される。

第一に、様々な「間／相互 (inter) 性」をになう「間文化研究」や「国際文化研究」では避けられない点として、本研究もまた、議論が広がりすぎていることが指摘できよう。本論3部11章という大部な構成を取るゆえに、多くのジャンルや学問領域に言及することによって、ひとつの論文としての整合性を維持し、統一的な論点を確保することを困難にしていると言わざるを得ない。タイトル・サブタイトルと本文の整合性はそれなりに維持されているとしても、章と章との連関の有機的つながりが希薄な部分が見られることが惜まれる。よりシャープな議論を展開するためには、ある程度論点を整理し、基本的な概念の意味内容を絞り込むことで、論文全体としての統一性をはかることが必要となろう。それとの連関で、章・節のタイトルそのものがにわか理解しにくいものが散見される。さらなる検討が必要とされるところである。

第二に、田島論文の重要な論点は、あらゆる二項対立的価値の間に引かれる「境界線」とその設定に潜む「暴力性」の暴露であった。それにもかかわらず、本研究のアプローチとして、「理論」と「実践」という伝統的な二項対立的アプローチが採用されている。その一方で本文では、「理論的实践」という表現や「実践の哲学」のように、両者の不可分離性が指摘されてもいた。筆者の「間文化性」の立場からしても、理論と実践は唯一不二の関係にある。またデリダの著『グラマトロジーについて』(1967)における「テキストに外部はない」というテーゼに基づくならば、テキスト内部の「理論」とテキストの外部としての「実践」という二項対立は脱構築されるはずである。しかも「実践」概念が道徳性や倫理性を孕むとき、「理論的实践」もまた倫理-政治化される可能性があり、倫理-政治的なコンテキストに巻き込まれることも不可避である。それゆえ、田島論文は、デリダの脱構築的方法を積極的に採用することによって、伝統的な理論／実践という二項対立的アプローチの限界が示されるだけでなく、自らの考察の立場が倫理-政治的に脱構築されざるをえないという事態を招来してしまう。したがって、本研究の考察方法として脱構築的方法を採用することに対して、もう少し自覚的になることによって論述の工夫の可能性があったと考えられる。

第三に、哲学・倫理学研究の側面から見れば、死と暴力の「エチコ=ポリティカル・エコノミー」を哲学的に分析する際に、なぜ田辺哲学とデリダ脱構築哲学でなければならなかったのかという点について、本研究は十分な説得力を持ち得ていない。特に、両哲学の結びつきについて言えば、マルティン・ハイデガー (Martin Heidegger, 1889-1976) の哲学が参照されてしかるべきであろう。田辺が同時代のハイデガーをライバル視していたことは周知の事実であり、彼の晩年の「死の哲学」が、ハイデガー哲学との対決の結果として構想されたことは哲学史的事実である。またデリダは初期の現象学研究から一貫して、ハイデガー哲学の影響を多大に受けている。蛇足ながら付け加えるならば、田島論文でも触れられているように、デリダの「脱構

築 (déconstruction)」は、ハイデガーの「形而上学の破壊 (Destruktion)」から取られている。つまり田辺哲学とデリダ脱構築哲学との強い結びつきは、ハイデガー哲学の批判と超克とを目的とする点からもアプローチ可能であったと考えられる。田島論文は、この点をより明確に意識することで、田辺哲学とデリダ哲学を採用したことに対して説得力を持たせることができたと考えられる。

第四に、第3部のカント哲学の脱構築的読解が展開される際に、ジョルジュ・バタイユの「太陽」(例えば『太陽肛門』(1931))のメタファーが用いられているが、田辺とデリダの「自己犠牲」の思想を検討する第1部でも、バタイユの「供犠」の思想を積極的に活用することによって、第1部から第3部まで首尾一貫した論述展開ができたと考えられる。バタイユの「消尽」論や「供犠」論は、人類学者マルセル・モース(1872-1950)の供犠論や『贈与論』(1925)の影響を受けており、デリダの『時間を与える』(1991)や『死を与える』(1992)で展開される「贈与のパラドックス」も、モースの贈与論に影響されている。こうした点からも、デリダの「自己犠牲」思想のうちに、モースやバタイユの影響を見ることで、田辺の宗教哲学とデリダ脱構築哲学とを宗教(人類)学的視点から補完することが可能となったと思われる。その点で改めて触れておくべきなのは、田辺とデリダを「宗教(学)」という伏線に明確に目を向け、本研究内に正当に位置づけるということである。この点について、間接的には触れられているが、章・節のタイトルに採用されている以上、より明確に位置づける必要があったと思われる。そうすることで、田島論文が指摘する「エチコ=ポリティカル・エコノミー」構造が宗教(学)的にも基礎づけられるべき性格のものであり、「エコノミー」概念が経済学的概念にとどまらないことを、説得力をもって論述することができたように思われる。さらに宗教と死との関係に加えて、宗教と生との関係にも着目すれば、田島論文の説得力は一層増すはずであろう。

それとの関連でいえば、第五に、社会科学的観点から指摘できる課題として、田島論文には、重要概念のひとつである「ポリティカル・エコノミー」の歴史的変遷、または「交換価値」「使用価値」などの経済学概念について、やや誤解を生みかねない説明がある。しかし、第4点目で指摘したように、「エコノミー」概念の倫理学・宗教(学)的な考察を積極的に導入することによって現代経済学との差異が際立ち、疑念が除去されるだけでなく、論述そのものにも厚みが出ると考えられる。また田島論文が「境界設定」の「暴力性」を論ずる際に、「ボーダー・スタディーズ(border studies)」(例えば、「境界線の政治学」)に言及することによって、政治学的考察との差異化を図ることが可能となったと考えられる。

さらに第六に、田島論文の鍵概念である「アート」概念は、「技術」・「芸術」・「テクニク」・「科学技術」・「テクノロジー」と同義として用いられており、それぞれの概念の説明が十分になされていないため、厳密さを欠いていると言わざるを得ない。「アート」概念の多義性としては、そのつど説明が付されているとしても、それぞれの術語が微妙に異なる意味をもって用いられる現状からも、術語の意味の確定には細心の注意が必要となろう。

しかし、これらの課題や問題点は、田島論文の本質的な内容に比べれば、表層的な問題に過ぎないともいえよう。本研究は、田辺哲学とデリダ脱構築哲学との間に立ちながら、両哲学の深部

にある宗教的思想を掘り起こし、そこから社会や国家に潜在する「死」と「暴力」の「エチコ=ポリティカル・エコノミー」構造を明らかにしようとする、野心的で斬新かつ挑戦的な試みであることは明白である。筆者の目的は、国家や社会において「境界設定」の暴力が、「安全保障=セキュリティ」の名の下に、倫理・政治的に異質な他者を排除するという暴力を行使するだけでなく、その暴力が翻って自らをも攻撃する可能性をもつという「自己免疫疾患」に類比した構造を持っているという点を指摘したことで、極めて現代的な意義をもつ。その意味で、本論文の目的や成果、さらにはその今日的意義を正当に評価すべきであろう。田島論文は、「国際文化研究」の新しい可能性を拓き、斯学がどのようにその歩を進めればよいかを示したという点で、ひとつのモデルを提供し得たといえるのである。

それゆえ、上記の諸課題や疑問点・修正点があるにもかかわらず、田島論文は、その優れた研究成果を損なうものではない、と確信する。

8. 結論

以上により、審査小委員会は、田島樹里奈氏の博士学位請求論文『〈死〉と〈暴力〉のエチコ=ポリティカル・エコノミー デリダと田辺における〈メディア〉と〈アート〉の間文化研究』を優れた研究であると評価し、博士（国際文化）の学位を授与されるに十分な資格を有するものである、との結論に達した。